

グローバル・ヒストリー 期末レポート講評

課題「私たちは歴史 Worlds of History から Global History として何を学ぶことができるか」

2010/3/31 三浦

<総評>

提出者は71名、全体としてよくできていました。

高校での歴史(日本史、世界史)の授業は、「人名や事件などの個別的な知識の羅列や暗記の印象が強かった(苦行?)」。この授業では、「歴史は時代や地域をこえて過去から現在そして未来へとつながっており、見習うべきは手本として継承し、反省すべき点は改善していく」つまり「現在の地点から未来にむけて歴史をみる」ことの必要性や意義を学んだ、という意見が多数ありました。同感です。これを「全体像を把握することによって「惚れつつ醒める」ことができる」(人文1年)と巧みに表現した人がいました。また、現在の国際協力や国際開発の場面で、「-zation」の二面性を検討したのも目立ちました。

<秀作紹介>

オリジナルで説得力がある観点を提示した秀作の一部を紹介します。

「(配布資料の Reflection of Globalization には) 歴史を研究する際の重要な考え方の癖として、絶えず変化のプロセス、論理を現在・事実とつきあわせ、新しい情報にそれが一致するように改めなければならない、という部分がある。この文から『創造の方法学』(高根正昭)をいう新書の内容を思い出した。しかし、歴史学は厳密には科学ではない。資料が信頼のおけるものなのかわからず、再現して実験をすることもできない。しかし私になによりも大切だと思ったのは、知的創造ということである。世界がこれからどうなっていくのか、人、物、金、情報だけでなく紛争、テロ、感染症、などあらゆるものが国境を越える現在、なにが世界に、人にとってよい方向なのか、そこまで考えられて初めて歴史を学ぶということになるのではないか」(人文1年)

「本来、異文化・異文明はある文明の発展にとり重要な要素であり、必ずしも受容者に害をもたらすものではない。しかし、近現代においては植民地、途上国の文化が従属的な地位に陥っている。大きな違いは受容側の選択権の有無であろう。昨今 EU のような地域共同体は、抑圧的、拡大志向の近代型帝国とは異なる統合の仕方を示しつつある。異なる時代を比較対象することで、問題を洗い出すことはある程度有効である。そのうえで現在の状況を捉えると、グローバル化と多極性を両立させるような方向性が観られつつあり、これを試みるべきであるということができないのではないだろうか」(人文2年)

「(模倣) タイプの発展は、危険性を孕む。ひたすら模倣対象を追い続けるということであり、追いかけ、おいつき、そこで終わりというわけである。つまり、それから先がなにもない。いま現代に求められていることは、独自の文化の originality の必要性である」(人文1年)

「ある人々が文化の同一化を強制しようとする、感情面での優位性が生まれ、ひいては政治・経済の優位性へつながっていく。文化的侵略は、実質的な侵略に発展する大きな危険をはらんでいるといえる。今後の国際社会で文化の同一化が進行するのは自然なことであろう。歴史から学べるのは、平和のためには、自己決定を尊重する自由な空気と、多様性を認める視点が不可欠だということである。異文化と接する際には、勘定と文化のつながりを冷静に理解したうえで、存分に理性を働かせ、文化的侵略ではなく、文化的な調和を目指す必要がある」(言語文化1年)

「(日中歴史共同委員会の作業をみても) 捉える人によっても解釈には幅が生まれる。歴史を一視点から見、過去ここではどんなことがあったのだと覚えるだけなのか、歴史は国境で、年代で区切られるものでなく数え切れない人々の交わりであったとみるのが世界史と Global History の学び方の違いに思える。新たな気づきを、自分が何に向かっているかを考えさせるために歴史を学び取っていきたい」(人文2年)

「①各地域の Worlds of history、相互の関連性をみることによって現在われわれの住む世界を形作るメカ

ニズムを明らかにできる点②現在から未来に関して、明らかにされたメカニズムの課題・問題点から解決策を見出すためのヒントを得られる点。①の起点は過去から、②の起点は現在からであり、アプローチの面からみると①はすでにおきている問題を取り扱う「治療型」のアプローチ、後者はこれから先問題が起こらないように努める「予防型」のアプローチといえる」（人間社会2年）

「高校までの歴史の学び方とは、いわば史実を「点」としてみることであった。しかし今回のこの講義での歴史は、私にとってかなり「生きたもの」として頭の中に入ってきた。焦点はさらにミクロに当てられていても、その点と点を文化、生活、人、といった線で結ぶ作業によって、さらにマクロな視点にたてることを学んだ。・・・かつては相互理解の線引きを自／他の二分とし、さらにはその基準を事故におけば良かった。しかしグローバル化が進むということは、私の周りの「他」がさらに増えることである。だから私たちは尺度をもっと広げなければならない。一つの大きな流れを理解するために、その構成要素を理解する。ここで言う理解とは、単に知るのではなく、新たな視点の座標をもつということだ」（言語文化1年）

「西洋化 Westernization は、私たちが選択・決定したことではない。私たちは開国や敗戦によって、否応なく近代化 Modernization の流れに巻き込まれ、資本主義化 Capitalization したのである。つまり-zation は選択される変化ではなく、選択不可の流れなのである。私たちは西洋化するかどうかについて判断をしたことはないし、西洋化が間違いであるというのも、後の判断に過ぎないのである。私たちは、選択肢のすべてを残すことに懸命になり、喪失を「悪いこと・マイナス」と決めつける傾向がある。しかし、かつて異文化だった仏教が、日本の文化として新たな可能性を生み出したように、喪失は新たなものを生み出すきっかけになりうるのである」（言語文化1年）

「キーポイントは3つある。まず一つ目は、平等と進化の同時性だ。二つ目は originality である。3つ目は、Quality of Life だ。「人々の生活の質」を念頭において見つめることによって、多文化の導入や他国の制度の導入によって社会に新しく生まれる格差は、「目指す方向はそっちではない」という気づきによって防ぐことは可能だと思った」（人間社会1年）

「授業を通して、歴史の中でたびたび繰り返されてきた傾向をいくつか見つけた。①先入観や偏見があると、事実を正しく認識できない②人々が互いに寛容であり、人種を越えた交流があると新しい知識や富が流布されやすい③昔から、他のいいところは受け入れ、それ以外は捨て去るという選択的透過性の仕組みがあった④国の発展のためには中産階級の力が強いことが不可欠であった。⑤西洋人はキリスト教の福音主義にのっとり、植民地を西洋化しようとした。歴史の中で予測不可能なことが突然起きることがあるが、大概の事は過去の経験から予測できるのではないだろうか。過去の過ちを忘れず、学ぶべき点は学び、異なる意見も聞く。基本を徹底することがこれから求められている」（言語文化1年）

表題が優れていた例

「まとまる世界」「History repeats itself」「グローバル・ヒストリーの内的応用術」「Global history から開発を考える」「文明開化の条件」「国、文化、心の境界線」「これからの西欧化」「原因を問うこと」